

第一章 ライフヒストリー研究の展開

ライフヒストリーは、学校の方針やカリキュラムが教師によって受容され、実施される過程を検討する研究手法の一つである。ウッズ「訳註…イギリス、オープン・ユニヴァーシティの教授、教師研究で高名」は、次のように巧みに論じている。彼が調査した教師、トムにとって、

カリキュラムという領域は、教師の生活における苦しみやつまずき、助け合い、喜びと悲しみ、策略とその対策から生まれ出た、活気ある人間的な過程である。たんなる知識の集合体や技術の寄せ集めではない。まして集団による行動の結果でもない。トムの事例は、個々人が自分自身の人生を描き、さらに個人の深層においてカリキュラムと関わられることを、少なくともある程度は示している。このことを十分に正しく評価するためには生活全体を視野に入れる必要があるのだと、私は論じてきた。⁽¹⁾

ライフヒストリーという手法の起源

最初のライフヒストリーは、今世紀の初頭、文化人類学者によってアメリカ・インディアン酋長の自伝が集められたことにはじまる。それ以来、ライフヒストリー研究は主として社会学者によって行われてきた。本章では、ライフヒストリーを学校研究に用いるべきだと論じようとしているが、ライフヒストリーの盛衰を検討するには、社会学者によって現在までのようにライフヒストリーが用いられてきたのかを究明しておかなければならない。社会学者にとってライフヒストリー研究発展の重要な画期は、一九二〇年代にトーマスとズナニエツキの壮大な研究『生活史の社会学——ヨーロッパとアメリカにおけるポーランド農民』(一九二七年)によってもたらされた。トーマスとズナニエツキは、アメリカに移民したポーランド農民の経験を検証する際に、主に移民の自伝的記述、日記、そして手紙を使用した。この著者たちにとって、ライフヒストリーは社会科学における最良のデータであった。

個人の経験や態度を分析するとき、われわれはその人のパーソナリティに限られないデータや基本的事実に基づかるのが常だ。それらは多少なりとも一般性を備えたデータや事実の集まりの例

として処理できるし、それゆえ社会的生成の法則の決定因にも使うことができる。社会学的分析のための資料を引き出すのに、ある一人の詳しい生活記録から引こうと、大量現象の観察から引こうと、いずれにしても社会学的分析に当たった問題は同じ事である。ただ抽象的な法則を探求しているときでも、具体的なパーソナリティの生活記録にはほかのどの種の資料と比べても際立って優れた点がある。個人の生活記録をできるだけ揃えれば、それは完璧な社会学的資料となると言えよう。だから社会科学が仕方なくほかの資料を使わざるを得ないのは、社会学的問題の総体を覆い尽くすことができるような記録を、その時々 to 実際問題として十分入手できないという理由と、社会集団の生活の特徴づけに必要な個人的な資料をすべて適切に分析するには莫大な労力が必要だという理由があるためにほかならない。かりに大量現象を資料として、またある出来事をそこに参加した諸個人のライフヒストリーと関係なくやむを得ず使っているとすれば、そのことは現在の社会学的方法の欠点ではあっても利点ではあり得ない。⁽²⁾

トーマスとズナニエツキの先駆的業績により、ライフヒストリーは正当な研究手法として確立された。ライフヒストリーの傑出した地位は、シカゴ大学において、とくにロバート・パークが行った社会学的研究の華々しい伝統によってさらに強化された。パークの下で完成した都市生活研究として、スラッシャー『ギャング』(一九二八年)、ゾーボー『ゴールドコーストとスラム』(一九二九年)、アンダ

ーソン『ホーボー』（一九三三年）、そしてワース『ゲットー』（一九五八年）があげられる。⁽³⁾これらの研究では、ライフヒストリーの手法が大いに活用された。かくしてライフヒストリー研究は、クリフォード・ショウの『ジャック・ローラー』（一九三〇年）での「強盗」⁽⁴⁾の分析や、エドウィン・サザーランドの『職業窃盗家』^{プロフェッショナル・シニフ}（一九三七年）の刊行によって一九三〇年代に頂点を迎えた。ショウの研究に対するハワード・ベッカーのコメント（一九七〇年）は、ライフヒストリーという手法の重要な長所について次のように指摘している。

知識人にも社会学者にさえも知られていない文化や状況から発せられる声を分析することにより、『ジャック・ローラー』は、もつとも深遠なレベルでの理論の改良を可能にした。スタンレーの肌に触れることで、われわれは、そうした人々に対する強い偏見を感じ、それに気づくことができる。そうした偏見は、通常、われわれの思考に浸透し、われわれが調査している問題のあり様を決めている。さらにスタンレーの生活に本当に入り込むことにより、研究計画をたてる際に、当然のことだと思っていたこと（そして当然そうではないと思っていたこと）が理解できるようになる。すなわち、われわれが質問を作成するときには、犯罪、スラム、そしてボーランド人をどのように考えていたかがわかる。⁽⁵⁾

ベッカーはこう述べることで、スタンレーの話が「犯罪者の視点から犯罪についての問いを投げかける」ことを可能にすると断言している。続けて次のように述べる。

もし、われわれがスタンレーのことを真剣に考えるならば、といっても彼の話によって真剣に考えざるをえないのだが、これまであまり研究されていない問題をうまく提示することができる。すなわち、犯罪者を扱ってきた人々、そこで使われる戦略、社会についての仮定、そしてそうした人々が従ってきた制約と圧力についての問題である。⁽⁶⁾

このようなベッカーのライフヒストリーについての主張は、一九三〇年代のシカゴ大学の社会学者たちによる見解を下敷きにしたものである。ライフヒストリーという手法の方法論の基盤を分析したもつとも優れた試みは、おそらくグラードの『ライフヒストリーの判断基準』（一九四九年）であろう。彼は、ベッカーに先立って「個人の生活に関する詳細な研究は文化全体についての新たな視点をもたらすが、それは形式的な横断的観察だけでは到達できない⁽⁷⁾」と論じた。グラードの主張がどこか聞き慣れた印象を受けるのは、おそらくそこにジョージ・ハーバート・ミードの影響が反映されているからであろう。グラードは次のように論じている。「われわれが文化というレベルで観察者の立場になるやいなや、個人は群衆の中に消え、概念は決してその個人に立ち戻ることがなくなってしまう。

『文化の中に消え去った』後、個人は推論により作られた文化形態の断片となり、それは再定義された文化形態という糸によって踊らされる操り人形のようになる⁽⁸⁾。これに対して、ライフヒストリー研究者は、

ライフヒストリーの対象を連鎖する社会的伝達の結節点^{リソ}としてとらえることができる。彼（ライフヒストリー研究者）以前にも結節点があり、それによって、彼は現在の文化を獲得した。ほかの結節点も彼が伝える伝統の流れに従って続いていくだろう。ライフヒストリーはこうした過程の一部分を描こうとするものである。すなわちそれは歴史的連続において複雑に構成された集団が営む生活という流れの一つについての研究なのである⁽⁹⁾。

ダラードの見解は時代遅れのものが多かったかもしれないが、「文化遺産」と呼ばれるもの、すなわち集団が持つ伝統と将来への期待の重要性、解釈し行動する個人独自の歴史と能力、そしてそれら相互に存在する緊張関係についての議論はとくに優れていた。この緊張関係に焦点を当て、ダラードはライフヒストリーが文化、社会構造、そして個人の生活の間にある関係を明らかにする手法であると論じた。こうしてダラードはもつとも優れたライフヒストリー研究において「状況は他者によって定義されると同時に、主観によって定義されることを念頭におく必要がある、ライフヒストリーはた

んにこうした両局面を定義するだけではなく、公的な状況による圧力と、その状況を個人が内的に定義することによって生み出される力をわれわれに明解に示すものである」と考えていた。この確信、あるいは一般的な緊張関係について言明しようと試みることが重要なのである。なぜなら「ある『状況』で公的、平均的、あるいは文化的に期待される行為と人間の現実の行為との違いが生じるが、その際には常にそこに個人的な解釈が生じたことが示されている」からである⁽¹⁰⁾。

一九三〇年代に頂点に達した後、ライフヒストリーによるアプローチは地位を失墜し、しばらくの間社会科学者から捨て去られてしまう。その第一の理由として、統計的手法が強く喧伝され、社会科学者によって多く用いられるようになったことがある。しかし、より重要なこととして、エスノグラフィ志向の社会学者の間で、人間の行動を理解するための基礎として、個人史よりも、状況がより重視されるようになったことがあげられる。

一九三〇年代以後、社会学者の主流はライフヒストリーにほとんど注意を向けなくなっていた。だが、最近になってようやく回復の兆しが現れ、とくに逸脱の社会学では、ボグダンのトランスセクシュアルの研究（一九七四年）、クロツカーズの盗品売買業者の研究（一九七五年）、そしてチャンブリスが優れた歴史感覚で職業窃盗家を再検討した研究（一九七二年）が発表された⁽¹¹⁾。このほかライフヒストリーの手法を再び活用するようになった周辺のグループに、アメリカのスタッツ・ターケル、イギリスのジェレミー・シーブルックやロナルド・ブリスのようなジャーナリスト的な社会学者と、いわゆる

る「オーラル・ヒストリアン」⁽¹²⁾と呼ばれる一群の人々がいた。ダニエル・ベルト編『個人史と社会——社会科学におけるライフヒストリーのアプローチ』⁽¹³⁾（一九八一年）は、この研究方法を復権させる重要な一歩であった。

こうした研究者たちは周辺的で、まとまった研究集団ではないが、ライフヒストリーの可能性を再検討する議論を展開している。とはいえ、ライフヒストリーの現代的な意義を述べる前に、ライフヒストリーがこのように長い間なぜ社会調査や参与観察から退けられてきたのかを検討しておくことは重要であろう。なお、その際強調しておくべきことは、ライフヒストリーを衰退させた政治的、および個人的要因ではなく、根本的な方法上の障害を明らかにしなければならないということである。

ライフヒストリーの衰退の要因

一九六六年に、ベッカーはアメリカの社会学におけるライフヒストリーの状況を次のようにまとめた。「ライフヒストリーを用いることで多様な科学的研究が可能になることを考えると、ライフヒストリーが相対的に無視されている状況に驚かざるをえない」⁽¹⁴⁾。社会学者は決してライフヒストリー全体を否定してこなかったとはいえ、標準的な研究方法の一つとして活用することもなかった。このことは昔も今も変わらないとベッカーは述べている。「社会学者はライフヒストリー研究について知っ

ているし、学生にもその文献の講読を課している。しかし、研究者は通常ライフヒストリーの資料を集めようとはしないし、それを自分の研究方法の一つにしようとも考えない」⁽¹⁵⁾。

ライフヒストリーが衰退した責任の一端はシカゴ大学社会学部にある。同学部では、一九二〇年代の終わりから、ケーススタディ（そして、ライフヒストリー）と統計的手法のいずれを重視するかをめぐって対立がおこり、この過程でライフヒストリーは危機に瀕することになった。フェアリスはシカゴ社会学についての研究を行い、この議論に影響を与えた重大な出来事を次のように記している。

この問題を検証するために、ストウファーは、数百人の学生を被験者にして自伝を書かせ、とくに飲酒の経験や禁酒法についての感想はかならず記入するよう指示した。自伝は、ライフヒストリー調査に熟練した幾人かの審査員に読んでもらい、禁酒法に対する各々の被験者の態度が、一定の基準で度盛りされた評価線上のどこに位置するかを示してもらった。その結果については審査員同士の一致も図られた。以上の作業と同時に、被験者のそれぞれはサーストン尺度によって構成された質問紙に回答した。そして前述のライフヒストリーを基礎にした審査員の評価と、この尺度化された質問紙の回答結果が一致する、との結論に達した。実際この結果から、少なくともこの尺度スコアにかなする限り、ライフヒストリーの記述とその判定に要した長くつらい作業はまったく必要がないほど、その尺度化は問題の内容を言い表しているとの事実が立証された。⁽¹⁶⁾

シカゴ大学で行われたケーススタディの分野においても、エスノグラフィの手法、とくに参与観察という別の手法によってライフヒストリーは衰退していた。このようになったのは、おそらくへ同大学の「ブルーマー」とヒューズの研究志向に原因があった。この二人の社会学者は、一九二〇年代および三〇年代のシカゴ学派と、マッツァが「新シカゴ学派」と名付けたベッカーやゴフマンなどへの橋渡しをした。ブルーマーのシンボリック相互作用論は、過程と状況をもっとも重視し、個人史を用いた解釈、たとえば社会構造の影響力についての解釈にはひどく懐疑的であった。ヒューズの比較的手法による職業研究は、職業人が直面する定型的な問題や職業上用いられる戦術に関心があったため、個人史への関心は限られたものとなった。加えてライフヒストリー研究で中心的な役割を演じていたシカゴ社会学の方法的折衷主義の衰退を促進したもう一つの要因に、シカゴ大学自体が社会学研究の中心から脱落したことがあったことも指摘しておく。

ライフヒストリーの命運は、社会学が学問として成立した歴史と複雑に絡み合っている。つまり、ライフヒストリーの方法論上の問題が、抽象理論を発達させる必要に反するようになったのである。社会学が特定のコミュニティ、機関、組織について詳細な説明を行うことに強く関心を持っていた際には、その弱点は重大なものではなかった。しかし、社会学のライフヒストリーの観点から見れば、社会学が学問として抽象理論へと向かおうとする全体的な潮流は避けがたいものであった。このような動向にあつては、社会学者がほかの学問からの尊敬を得ようと望んだことも無理のないことである。

う。その結果、社会学の主流は「社会学者が研究対象としている人々にもっとも適切なカテゴリーではなく、社会学者自身の理論による抽象的なカテゴリーで作り出されたデータ」⁽¹⁷⁾に固執するようになった。

抽象的、学術的な理論へと向かうことで、社会学的方法是さらに「専門的」になった。基本的に、それはベッカーが定義したシングル・スタディによる調査モデルへと向かっていった。それは次のようなものであった。

私が使うこの「シングル・スタディという」言葉は、自己充足や自己完結と考えられる研究プロジェクトを示すものである。そうした研究から導かれる結論を受け入れる場合にも拒絶する場合にも、その研究からすべての根拠が与えられる……。シングル・スタディは、次のようにして主要な知識体系と統合される。すなわち、既知のものを観察することによって仮説を導きだす。そして研究が終了した後に仮説が論証されれば、その仮説はすでに科学的に既知であるものに追加され、さらなる研究の基礎として扱われる。重要な点は、仮説が証明されるのも否定されるのも、研究者が行った調査ですでに発見されたものに基づいていることである。⁽¹⁸⁾

社会学研究がこうした形式に向かわざるを得なかったのは、社会学が新興の学問であるという特質

とその組織の構造に明白に現れている。博士課程の学生は仮説を立てて、検証しなければならず、學術誌の論文は、著者自身や別の学者の学問的仮説を検証しなければならない。また研究計画では一般化しうる目的を述べ、証明しようとする課題の重要性を提示しなければならない。この支配的であった経験モデルは、ほかの科学から導かれて完成したものであり、社会学を完全に成熟した学問として制度化するためには重要なことであった。しかし、このことによって社会学は方法論や資料源を十分に拡大することに失敗した。

このことへ社会学の制度化により、調査が持つほかの機能の無視、とくにある一つの研究が孤立した研究と見なされ、それ自体では確定的な結果を生み出せないが、その研究による貢献が研究活動全体におよぶとしても、それは無視されることになった。この基準によると、ライフヒストリーは確定的な結果を生みだせないことになるため、ライフヒストリーによって成しえることがわからなくなり、結局ライフヒストリーの資料を得るために必要な時間を費やす努力をしなくなってしまった。⁽¹⁹⁾

ベッカーは社会学者が将来的には「科学的研究活動の複雑さをさらに理解する」ようになり、このことがライフヒストリーを復権させ、一九二〇年代および三〇年代のシカゴ大学の社会学者によって

生み出されたものと同じようにライフヒストリーの資料が精力的に生み出されるという希望を提示して締めくくっている。

ベッカーによる批判の後、社会学では「実証主義」、すなわち仮説検証モデルによって失われてきたものを再評価しようとする新たな方向性を示すものが多くなった。⁽²⁰⁾しかし、明確に個人史を重視した方向であるバーガーとルックマン⁽²¹⁾の現象学的社会学でも、今のところ経験的研究はわずかにすぎない。その一方で解釈学的社会学の研究は、相互作用主義やエスノメソドロジーの影響によって、状況を非常に重視してきた。社会学の新たな方向は、「実証主義」モデルから遠ざかることにあったが、それは直接に特定の状況や時間に向かい、ライフヒストリーと個人史は社会学の研究活動の外側に取残されてしまうという逆説的な結果となった。たとえば、相互作用主義者の研究は、特定の状況における行為者集団に現れたパースペクティヴや定義に焦点を当てる。その状況の背景には、直接的ではないにしても、行為者の潜在力を抑圧するある種の堅固な「構造」や「文化的遺産」が存在している。より決定的なモデルを求めて状況を重視することで、このような歴史的過程との繋がりを失ってしまうのはごく一般なことである。こうして相互作用主義者が行為者にとって意味ある対象に関心を示す際には、その意味づけが個人の、あるいは集団の歴史によって行われたものではなく、特定の状況を処理するために集団によって行われたと見なされることがますます多くなってきた。

社会学のほぼ半世紀にわたる展開を見れば、ライフヒストリーという手法について数多くのことを

知ることができる。まず社会学者は社会科学として一般化し得る事実と抽象理論の発展を真剣に追求しはじめたため、ライフヒストリーによる研究は重大な方法的欠陥を持っていると見なされるようになった。それに加えて、ライフヒストリー研究がたんに「物語ること」として発表されることが多く、そのような手法は「学問的」あるいは「科学的」実践として地位が低かったため、方法論として採用されることが少なくなってしまう。逆説的ではあるが、社会学の経験モデルに対する対抗策が発達したときでさえ、相互作用主義とエスノメソドロジーという、いずれも個人史や社会的背景よりも状況や時間を強調する研究手法が採用された。さらにこうした新たな研究の方向は研究手法自体の地位の問題を伴っていたので、この点からもライフヒストリー研究は魅力的なものとはならなかった。この章の内容をある研究会で初めて発表したとき、クラスルームの相互作用論者は次のように述べてライフヒストリー研究を拒絶した。

われわれはこうした新しい方法論を提示すべきではないと思います……なぜなら、研究者としてのキャリアに障害となるからです。残念なことに今でもエスノグラフィーはとても地位が低いのです。

野心的な研究者のライフヒストリーに照らすと、ライフヒストリーという手法は魅力的ではないこと

が容易に理解される。

ライフヒストリーが政治的、個人的な理由によって使われないことは別に、明らかに重大な方法的問題も存在する。大きく二つの問題が社会学者によるこの方法に対する反論の根拠となっている。第一に、代表性、あるいは典型性の問題である。一般化し得る知識を達成せようとする志向は、政治的な正当性ばかりでなく本質的なものでもある。ライフヒストリーによる研究は典型性、代表性を保証できず、したがって理論を直接形成することができない。それと同時にライフヒストリーは非常に労力のかかる仕事であるという第二の問題がある。知見の一般化が保証されないということが、莫大な時間をかけなければならないという危惧と結びついてしまうのである。

ライフヒストリーの復権

—問題と可能性

ライフヒストリーを復権させるためには、その理論との関係を提示し、それによってもう一つの反論である、この手法が多大な時間を要するという性質を克服しなければならない。

先に指摘したように、逸脱の社会学者の中には、最近になってライフヒストリーの方法を採用し、この方法と社会学理論の間にある対立関係を解決しようとする者がいる。ファラデーとブラマーは、

ライフヒストリーと理論研究の関係を次の三点に整理している。⁽²²⁾第一は存在する理論の検証である（ベッカーが「ライフヒストリーはそれ自身で命題の決定的な証明を提示し得ないとしても、少なくとも提示された理論が不適当であると決定づける反証になり得る」⁽²³⁾と述べたように）。第二にデータの検討であり、それは「感受概念（訳註・ブルマーの概念で操作概念と対立する）、理論、概念枠組みを生み出すためである」⁽²⁴⁾。したがってほとんど知られていない領域において、ライフヒストリーは「その領域に関わる事例や問題に感受的になる技法を」提供する。第三にライフヒストリーは理論を活用することがある。

ライフヒストリーは本質的に理論研究と切り離すことができない。存在する理論の検証や実証には明らかに適当ではないが、反証の発見には有効であろう。ライフヒストリーが理論と併用されると、確証を与えるものではないが、ある理論で対象領域全体を解釈することがいかに可能なのかを見極めるのに有効である。ライフヒストリーが最適であるのは多くの概念、直感やアイデアを生み出すための探求的な方法として用いられる場合であり、それは現場と状況のレベル、歴史的な構造のレベル、同じ領域の内部、そしてほかの領域との関係の分析においてである⁽²⁴⁾（傍点は筆者）。

一般にライフヒストリーは相互作用主義と重要な理論的仮定を共有している。その仮定とは、個人の生活は多くの社会科学、とくに経験主義モデルによる説明によって信じられているほどは明確ではない、あるいは秩序立っていないということである。ライフヒストリーのもっとも大きな強みは個人の主観的リアリティに徹していることにある。つまり、それは「自分自身について話す」という主観を許容している。しかし、それ以上にライフヒストリーは「過程」という使い古された概念に意義を与えるものである。経験モデルでは、人生のさまざまな段階でアンケートを行い、異なる世代で変化した回答を過程と見なす。しかしこの手続きでは空白^{ギャップ}が生じてしまう。ライフヒストリーはこの空白を埋めることができる。

ベッカーによれば、巧みに記述されたライフヒストリーは、

かいま見ることしかできなかった過程を詳細に記述しており、しかもその過程を明らかにするデータは操作的、予測的な重要性を持っていなくとも理論的に重要であれば、最終的に引用されるものである。ライフヒストリーはこのように重要な相互作用的なエピソードを描き出すことで、個人、および集団の行為に新たな輪郭が形成され、自己^{セルフ}の新局面が生み出される。このようにして過程の根幹をリアリティを持って描写する基礎となることで、ライフヒストリーは仮説を検証し、組織に光をあて、そして閉塞した領域を再活性化させることに役立つのである⁽²⁵⁾。

ライフヒストリーの焦点は明確である。すなわちそれは個人の「リアリティ」と過程である。ライフヒストリー研究者の第一の関心は個人の真実を把握することである。つまり「個人が語るこのない普遍的な真実に到達するという（より重要な）課題に」関心を持っている。このように関心を持つことの問題は、相互作用主義者も同様に抱える問題ではあるが、個人の経験や過程が、広い社会の歴史的構造から離れてしまうことが多いことである。ライフヒストリー研究者は、社会の歴史に対する広範な関心が個人の意識に存在せずとも、それを考察し得るように常に個人にとっての真実に對するの関心を広げなければならない。したがって十全なライフヒストリー研究を行えば次のようなことが可能になる。

個人をその時代の歴史との関係で見ること、そしてその時代の社会に現れたさまざまな宗教的、社会的、心理的、経済的な動向に個人がいかに影響されたかを検討することが可能になる。しかもある個人のライフヒストリーとその社会の歴史との交差の場を把握することができるので、ある個人が行った選択、偶然の出来事、そして個人に開かれていた選択肢をよりよく理解できるようになる。⁽²⁶⁾

ライフヒストリーの復権において、社会学の研究活動を統一されたものとしてではなく、多面的な

ものとして捉えることが重要である。ベッカーの「モザイクを作り出す一片一片が、われわれの理解をほんの少し進める」というモザイクに関するイメージ、あるいはレヴィーストロースのジグゾーパズルを用いた類推は有用である。こうした方法で見なければライフヒストリーの位置は明白になるはずである。目的はそれぞれ確立した地位がある経験モデルと相互作用モデルとの対立を解決することではない。アンケートは先立って選択されたテーマを検証することができるが、そうすることで探求への道を閉ざしてしまっている。それを補うのが相互作用主義の研究であり、ライフヒストリーはさらにそれを発展させて個人の状況と生活を追求している。ライフヒストリーの復権によって、ジグゾーパズルは最終的にそのあるべき場所へと落ち着くことになる。すべてのピースが使われるのならば、その可能性はさらに高まるのである。

ライフヒストリーと授業研究

社会学の歴史をレビューする中で議論してきたように、社会学的研究の経験的モデルは、先だって選択された仮説を検証するシングル・スタディを強調するものであり、長く社会学の中心であったが、それは参与観察と相互作用過程を無視してきた。また逆説的であるのは、相互作用主義者とエスノメソドロジーによるモデルは、それまで無視されてきた領域を探求し続け状況と時間に焦点を当ててき

たが、個人史と歴史的背景を無視してきたことであつた。学校教育の社会学をレビューする際にも、こうした社会学の発展形態はかなりの程度まで妥当する。

現在の相互作用論とエスノメソドロジーによる学校教育の研究をレビューすると、二つの特徴的な仮定が見いだされるだろう。第一には、特定の状況と時間に焦点を当てるため、個々の個人史や、個人の視点、教師のライフスタイルにはほとんど注意が払われなかったことである。このことは一部には人類学からの類推によつてもたらされたのであろう。たとえば、フィリップ・ジャクソンの『教室での生活』(一九六六年)についての研究は、洞察力に富んだものではあるが、教師を多忙で退屈で変化のない環境で再生産される特殊な種族として描いている。

教室は相対的に安定した物理的環境というだけではなく、かなり継続的な社会的文脈をも与える。同じ古い机の向こうには同じように昔ながらの生徒たちが座っており、見慣れた黒板の前には同じように見慣れた教師が立っている。⁽²⁷⁾

結果として、こうした説明によつて教師は個性を失い、とくに交換可能で曖昧な存在になる。われわれがよく知っている、同じような昔ながらの見慣れた教師というようである。

第二の特徴的な仮定も、ジャクソンの研究に明確に示されている。それは不変性の仮定である。こ

れは交換可能性の一つである——時代にかかわらず、教師が誰であろうと、すべてのことはまったく同じにすぎない。この反歴史的アプローチも相互作用主義者、とくにエスノメソドロジーによる研究の特徴である。ペイン(一九七六年)によれば、

エスノメソドロジーによる研究で根本となる仮定は、社会的世界は基本的に獲得され続ける世界であるということである。社会的な出来事、環境、そして関係という日常世界は、始終、社会の構成員によつて作られ、獲得され続けるものであり、そして、こうした出来事、環境、そして関係は、生産される機会がなく存在することはありえないと仮定される。⁽²⁸⁾

しかしながら、このことが一面の真理である一方で、ペインが描く社会的出来事を作り出す行為者は、その者たちが関わる社会的出来事とは無関係に、そしてそれに先だつて存在することはありえない。このような歴史的、個人史的な背景を無視しているため、エスノメソドロジーや相互作用主義によつて特定の出来事の説明を位置づけ、一般化されたカテゴリーを形成することは問題が多い。したがって社会的な出来事のも様性を描くことは可能であり、内的な論理を明らかにすることもできるだろうが、そこではなぜ出来事が異なるのか、そして、なぜある出来事が共通なのか——ここでは学校の授業が何度も繰り返されるのはなぜなのか——が完全に理解されることはない。個々の個人史や歴

史的背景についての知識は、研究に広がりと深みを加え、より一般化可能なカテゴリーで理解を深めたいという熱意を実現するものであり、実のところそのことが責務なのである。

教師の交換可能性と不変性という、エスノメソドロジーと相互作用主義に見られる二つの特徴的な仮定について検討してきた。すなわち、先に述べたようにこれらの新しい研究方法は、社会学の主流であった「実証主義者」のモデルと同様に、個々の個人史や歴史的背景を無視してきた。ここではこれら二つの特徴的仮定の存在を詳細に論証することはないが、関連する文献を検討すれば、これらの特徴的な仮定がエスノメソドロジストや相互作用主義者によって行われた学校研究での指針や選択において共通のものであり、影響力を持っていたことを確認することができるだろう。ウッズによれば、社会学者は「マクロ社会学と、一方で歴史的過程、もう一方で個人史を結びつける」⁽²⁹⁾ことができる視点を開発しなければならない。しかし、ライフヒストリーのデータが不足しているため、これはたんなる非現実的な希望にとどまっている。われわれに残されているのは、一連の多様な教師のストラテジーを明確に描き出し分析することであるが、それは、特定の教師がいかにして特定のストラテジーを採用するようになるのかを理解することなく行われている。授業のように非常に個人的なものについて理解するには、その教師を個人として知ることが重要である。この領域におけるわれわれの知識の欠如は社会学的想像力の範囲を非常に狭くしている。

質的研究方法への批判からあまりにも遠ざかってしまうことを避けるため、この研究方法との関わりをもう一度確認しておく必要がある。本章のはじめに議論したこと多くは、結局、これまで過去

に参与観察を支持するために使われてきたものである。デンジンはその立場をうまくまとめている。

ライフヒストリーは参与観察によく似ている。その基本的な違いは対象の広さの違いにあり、研究関心の違いではない。⁽³⁰⁾

学校に関する相互作用主義者とエスノメソドロジーの研究は有力ではあるが、疑わしい教師モデルを生み出してきた。すなわち、そのモデルは広く交換可能であり、不変性の問題にさらされ、多様な基準を採用してはいるが、教師を扱うため明らかに恣意的に作られたストラテジーを採用してきた。私は教師が重要な個性を持っていないとする議論には反対の立場であり、態度、行為、そしてストラテジーに重要な違いがあり、それは教師によって、さらには分析対象とした時期によって異なっていると主張する。こうした違いがどの程度重要であるかを理解するために、われわれの学校研究を個人史や歴史的背景と再び結びつけないといけない。とくに個人史や歴史についての分析を状況の分析と再統合するよう主張しているのだ。こうした再統合により、状況から意図的に個人史や歴史が切り離されて行われてきた人間という行為者の研究と訣別することができるだろう。人間の行為のモデルは、状況と個人史および歴史的要因の役割、そしてその相互関係を強調することが必要とされる。

こうした方法で研究を進めれば、教師の生活と歴史についての研究も、社会的文脈における視野をさらに広げることになる。

第二章 教師の声を支援する

——教師の生活と教師の成長

はじめに

しばらく前から私は、教師の生活の研究こそがカリキュラム研究と学校教育研究の中心であると確信するようになった。私がこのような確信を持つようになった経緯を思い起こしてみると二つのエピソードが注目される。もしこれが私一人の個人的な信念の変化にすぎないのならばほとんど無意味であろう。しかし、この二つのエピソードは著しい進展を見せている教師の生活の研究に関する論議における多くの重要な問題に関連しているのである。

最初のエピソードは、私が大学で学んだ後、教員資格を得るための教育を受けていた時の出来事である。私は、中等学校時代の先生、つまりかつてもっとも感化を受けた恩師の下で教育実習をするた